

## 特集「第五世代コンピュータと人工知能の未来」にあたって

松尾 豊  
(東京大学)

栗原 聡  
(電気通信大学)

山川 宏  
(株)富士通研究所)

日頃から思っていることがある。Apple や Google, Facebook などの景気の良いニュース。シリコンバレーに憧れる若者達とそれを喧伝するマスコミ。Watson や Siri などのテクノロジーと、その華麗なマーケティング……。確かに、シリコンバレーを中心とするテクノロジーのレベルは高く、良いものを世界に送り出している。そこには確固とした自信と世界中の才能を惹き付ける魅力、そうした生態系を維持していこうという強い意思と責任感がある。こうした「王者としての強さ」や「意思」を、日本の情報系からはどうも感じられない。

一方で、歴史に「たれば」はないが、もし、Web の出現があと 15 年早かったら、今のシリコンバレーの座は日本だったのかもしれない。高度経済成長に湧く日本の、あのときのあのプロジェクトが、最も「王者」に近づいた瞬間だったのではないか。「第五世代コンピュータプロジェクト」のことを聞き、調べる中で、著者らはその技術的な内容よりも、むしろ、そのプロジェクトがもっていた王者たるための強い意思と、そのための戦略を感じることができる。その結果は賛否両論あるが、著者らは、あのプロジェクトは、確実にあの時代「勝つために振る価値のあるサイコロ」だったと思う。当時の書類を読んでも、強い意思とそのための戦略が伝わってくる。この意思が、今の日本に最も欠けているものではないか。

今、若い世代で「第五世代」を知らない人が増えている。シリコンバレーに憧れ、日本のソフトウェアは弱いと思っている。国が主導するプロジェクトも、どちらか

といえば後追いの、掛け声だけのものを感じる。別段、国粋主義になるつもりはないが、人工知能は日本人の考え方や日本の文化に向いていると思う。知能とは何かというのは、ただ一つの答えがあるものではない。多くの技術の擦り合わせが大事である。日本には人工知能の優れた研究者が数多くいる。今後、確実に人工知能の技術は必要とされるだろう。大きなブレイクスルーが起き、社会的な変革も伴うだろう。

人工知能の技術が進展し、そのニーズが広がっている今、我々はもう一度、世界の「王者」を目指す意思があるだろうか。人工知能の技術を、日本が拠点となって世界に発信していく、世界をリードしていく「意思」はあるのだろうか。この大きなチャンス、何としても捉え、世界の中で大きなイノベーションにつなげたいと願っているのだろうか。それとも、シリコンバレーそして世界の技術を後追い、物語るだけの存在でよいのだろうか。

実はそういう思いもあって、若い世代に第五世代について知ってもらおうこと、また当時の人にいろいろな思いを今の文脈で語ってもらおうこと、そして特に Web という新しい技術の発展のなかで、推論、機械学習、知識表現を捉えてもらうことなどを意図し、本特集を企画した。少し異例のことではあるが、学会の事務を長年支えて下さった岩田様にも執筆願った。当時の思い、今に続く技術の流れ、そしてこれからの我々ができること、やらなければならないこと、そういったものを、少しでもこの特集から感じていただければ幸いである。